横芝の碑

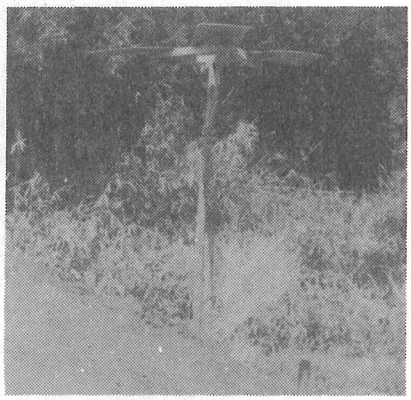
小堤日吉台の石標その後

（その六十七）

昭和三十九年一月発行の本紙に「ふる里の話題〝三角点（石標）〟」で伊能忠敬全国測量開始に際し、「我この大事業を為すに当り故郷の裏山日吉台にその原点を置く。」という文書が残っている由、更に古老の言伝え等もあり、日吉台に建っているこの写真の石標がその原点標ではないかと取沙汰されていたが、この程県から係員が調査に見えて目下調査中である。として石標の写真と、大総小校長の安井先生と県の係員が調査中の写真を掲載したことがあります。

この石標は、約十五糎の花岡岩角柱で、地上に三十糎程出ていますが、上端が大部欠けていて二字しか残っていません。それも下の点という字は分かりますが、上の字は頭部が欠けているので何と読むのか分りませんでした。噂を聞いたのか、時折他町村の人も見学に見えましたが、その中で「これは図南点と刻まれていたのではないか」という人がありました。図南（となん）というのは中国の故事で、鵬が大空に飛立つ時は南に向って翼を拡げるという、転じて大業を試みることを〝図南の志〟と言っている、という話を聞いていましたので、「成程ー」と頷いたものでした。

其後、大総地域の元軍人という方から「戦時中に陸軍の技師がこの石を見に来たので案内したことがある。地図を見比べていたー」という話を聞きましたので、安井先生と「県に連絡して見よう」と話し合っていたのですが、安井先生が転任された事等もあって、日吉台石標の調査についての話は立消えになっていましたが、町史発行を契機に、石標が三角点か図南点か、という話が再び起り始め「横芝の碑ではどうして小堤の石標を扱わないのか？」というお問合せの電話等も頂きましたので、三角点にせよ図南点にせよ、まず石標の上の文字を調べる必要があると考えましたので、大辞典等を調べて見ました。その結果、この文字は篆字の角という文字らしいこと（別記説明参照）が分りました。それに、先生が、幕府御用で実施された全国測量に、私情を挟んで大事な基点を定められた、ということは考えられないし、若しそうだとすれば、用具や人夫調達等の準備もありますので、先生御自身が出向いて来られて、小堤の地に少くとも数日間は逗留された筈です。処が町史にも紹介されている測量日誌（九十九里沿岸測量の途路小堤に立寄り、親類の屋形海保家に一泊等と記されている）にも、全くそれらしい記録はないそうです。戦時中陸軍で調査に来たということ等を思い合せますと、この石標は〝三角点（陸地測量部三角点標石）〟と見るべきで、文書に残っている原点というのは、地図作成上現在の三角点の様な役割を果すための点と考えてよいと思うのです。陸軍に測量部が設けられ、始めて地図を作成した時には忠敬先生作成の地図を参考にしたのですが、その精巧さと正確さに驚嘆したということですから、先生が設けられた原点に陸軍が三角点を設置しても決して不思議はない筈で、後世の人々が先生の恩恵を受けたものと見てよいと思います。そして、私達は改めてこの三角点にも先生の偉大な力が息遣いていることを慣び、その遺業を心から称讃したいものです。



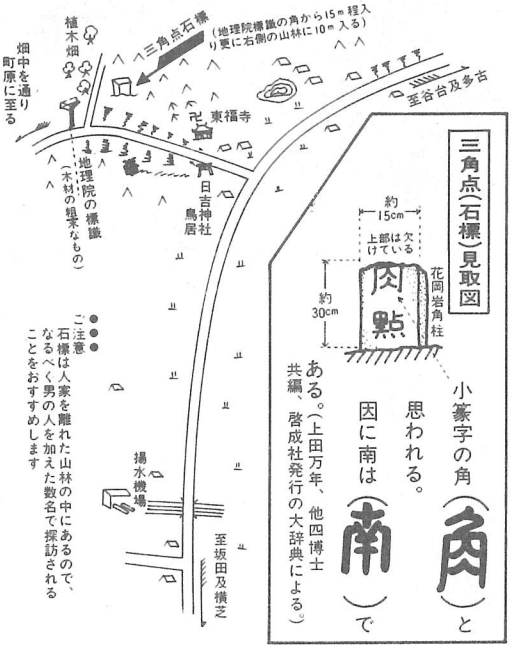
この稿を纒めている時、偶然にも、元横芝中におられた、小堤東福寺住職である戸村良彦先生から「日吉台の標石近くの道端に地理院の標識が建っている」という連絡を頂きましたので、早速馳付けて見ました。

標識は、三角点標石入口の道路の端に建てた木柱で、上端の三角に組んだ板には〝3月末日まで取毀さないで下さい。地理院〟と墨書してありました。標石との直接の関係は判りませんが、やはり日吉台の石標は〝三角点〟である、との感を深めました。

○写真は、四月十九日に撮影した地理院が建てた標識です。又見取図の上の文字は一見肉という字に見えますが、これは小篆の角という字の首部が欠けたものと思われます。南という字の場合は如何なる書体にもこの字形は見当りませんでした。尚石標は文字の説明上写真を用いず見取図にしました。

文化財審議会委員
小沢春光氏寄稿

三角点（石標）案内略図



小篆字の角（角）と思われる。因に南は（南）である。（上田万年、他四博士共編、啓成社発行の大辞典による）